

## 今津誓願寺の阿弥陀如来坐像—創建期本尊との関わりを中心に—

井形 進（九州歴史資料館）

誓願寺は、博多湾西部の今津に所在する。『誓願寺創建縁起』には、仲原太子が嘉応2年（1170）に発願し、同宿の寛智が安元元年（1175）に建立したとある。開堂の導師は栄西。創建期や近い頃の文化財も多く、栄西筆『誓願寺孟蘭盆縁起』、宝治2年（1248）大仏師僧宗慶作の薬師如来坐像、『大泉坊文書』等はその中核をなす。栄西は開堂の後、宋版一切経の渡来を待つためにこの寺に滞在し、文治3年（1187）には二度目の入宋を遂げた。ここは渡来文物を待ち、入宋の機を窺うのに好適な場であった。寺に伝わる銭弘俵八万四千塔、元時代の孔雀文沈金経箱や密教法具等は、そのような今津と寺のあり方をよく映している。

この誓願寺の本尊は、弥陀定印を結んで坐す半丈六の阿弥陀如来像である。鎌倉時代の作だと考えられてきたが、昭和51年（1976）に調査されて以来、あらためて調査や考察がなされる機会はなかった。その像が最近修復をうけ、針葉樹材を大ぶりに用いた寄木造の構造や、後補部こそ多いものの過去の修理でも、当初の造形が尊重された様子が確認され、像は当初の面影を留めていると判断された。その作風は、平安時代末期と鎌倉時代のそれを併せもち、造像はいわゆる藤末鎌初だと考えられる。つまり寺の創建期の作だということになる。

多彩な文化財を擁する誓願寺であるが、仏堂としては、本堂と毘沙門堂があるのみで、『筑前国続風土記』によると、江戸時代もこれに薬師堂が加わるだけである。かつて42の坊があったと伝えるものの、創建期も仏堂は一字のみだったことが、『誓願寺創建縁起』や、『大泉坊文書』中の「仁和寺宮庁下文」等から窺える。となると現本尊は、この堂に安置されていたことになるが、ここには『誓願寺創建縁起』から、周防の杣人の関りと当地での造像が知られ、『南無阿弥陀仏作善集』から重源の結縁も知られる、丈六阿弥陀像があった。

作風と構造から、当地での造像だと見られる半丈六像は、この丈六像と関係すると考えている。一堂のみの寺で、大型の阿弥陀如来像ばかり造像するのも不自然で、両者は実は同一の可能性もある。また別の像だとしても、半丈六像は丈六像の面影を伝えている可能性が高い。この時、陰刻線状の衣文が、宗像大社の阿弥陀経石の阿弥陀像等と通じることにも注目したい。これは、宋代彫刻の影響かと見ている。栄西や重源が関わり、日宋の接点たる今津で造像された創建期の本尊は、失われたと考えられてきた。しかし、造像時期や安置場所等の検討から、現在の本尊はそのもの、ないし面影を伝える存在だと考えられる。今後は現存像を通して、造形に即して具体的に考察を進めることが可能で、まず今回は、この造像が栄西よりもむしろ、重源の後の活動の一つの原型となった可能性を指摘し、また、藤末鎌初期の九州での宋代文物受容のあり方を示したい。